# 紲星あかりと！ゼロから始めるボイロ動画投稿生活

さっと帰宅

## 【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

我が家に、紲星あかりがやってきたぞ！なお

# 目次

プロローグ　ゼロから!!　――――――　1
第一話　私と、私の、ミチとの出会い　33

# プロローグ　ゼロから!!

アルコールと言うものは、適量、又は過剰な摂取により我々人類の判断を鈍らせることが多々ある。

「買っちゃおぉ～かなぁぁ～…？買っちゃうの～かなぁ～…？」

その日、詰めに詰めたバイトの連勤が終わり、一日千秋の思いでたどり着いた大型連休を堪能するように、深夜から酎ハイの空き缶製造機と化していた。

「なんか…このページ重くない～？おぉれの読み込みが出来ねぇってのかぁ～ぁ？」

得意でもない酎ハイがよく進むのは、２０才高卒フリーター天涯孤独男、職歴彼女なし、将来に立ち込めているのは暗雲だけ、だからだろうか。

「やっと読み込めた…、何だぁこのサイトぉ?密林じゃぁない?」

バイトの疲れと人生の不安、二つのデバフにより俺はその日に、人生で初めて酒に飲まれ思考が溺れ、端的に言うと泥酔していた。

「…お値段がぁ……数字が読めねぇ……わかんねぇ…ゼロがいっぱいだぁ……」

繰り返しになるが、アルコールは判断力を鈍らせる。それにより、取り返しのつかない失敗をする事が多々ある。神様や大妖怪でも、酒に溺れて大きな過ちを犯すのだから、人間程度では失敗をするのは仕方のないかもしれないが。

「よくわかんないけどぉ～、購入だぁ……これでぇ……俺も……動画投稿……」

泥酔状態、半分睡眠状態のまま、購入ボタンをクリックし、そのまま力尽きるように机に伏せてしまう。

なにかのサイトの購入ボタンを押した数秒後に、自分の部屋の中心が光り輝きだし、

何かの重たい物が落下した音を聞こえたが、明らかな異常事態に見向きもせず、俺は夢の中に落ちていった。

「……ぐぅぉー……」

アルコールは判断を鈍らせるが、謎の行動力により、事態が大きく変わることも、とても良くあることなのだろう。

それが良いことか悪いことかは、さておいて。

◇◇◇◇

「……っ頭いてぇ、てか寒ぃ……」

目覚めは最悪、身体の節々が痛い、それが、連休初日の朝の感想だった。

「バイト……は今日から休みか……頭いてぇし、昨日飲み過ぎたか…。せっかくの休み

に何してんだろ、……俺」

机の上に散らかった空き缶を眺めながら、ついため息をついてしまう。

こんな事をする為に休みを取った訳ではないのだが、昨日の自分に恨言でも言いたい気分である。

六日間という長い休みをとってやろうとしていた事は、ＶＯＩＣＥＲＯＩＤの動画作成である。

一時期から、オタク向けコンテンツに頭のてっぺんまで浸かっていた俺は、特にＶＯＩＣＥＲＯＩＤの動画が好きだった。

公式が、ふんわりとした設定のキャラクターを出すことにより、設定を付け足したり、改造する事で、購入者達の趣味嗜好性癖の入った個性的なキャラクターになる。

動画投稿者によっていろんな性格や、神絵師達により、さまざまな見た目のＶＯＩＣＥＲＯＩＤ達が生まれていった。

そんな多種多様なこだわりによって、現在進行形で広がっているＶＯＩＣＥＲＯＩＤ界隈にどっぷり浸かる事により、自分もそこに仲間入りしたいと思う事は至極当然の事で、なんなら遅いぐらいだった。

俺は一切、絵心の才能がないので、動画作成をやってみようと色々調べてみると、や

はり時間がかかる事がよく分かった。
取り敢えず、動画を作る上で必要な素材やソフトなどを揃え、バイトの店長に無理を言って動画作成に集中する為に休みを取ったのだ。
それで、ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ本体は昨日の夜購入する予定だったのだが…

「…はぁ～…」

ぼやけた意識が少しずつ覚醒すると共に、昨日の愉快だった記憶が戻ってくる。
ずいぶん昨日の自分は楽しく過ごしていたらしい、普段、ほとんど飲む事のない酎ハイをルンルン気分で買ってひたすら飲んで、ネット通販サイトの密林で買い物を……

ちょっとまて。

「……俺、密林で何を買った？」

何かの購入ボタンをクリックしたのは間違いない。
記憶にある限りは、泥酔しながらＶＯＩＣＥＲＯＩＤを密林で購入しようとした筈

だ、ただ、その辺りの記憶は霞んで思い出せない。
というか、ダウンロード版を買うつもりだったのに、なんで密林で買おうとしてるんだ?泥酔時の自分はやらかしてくれている。
自分の密林の購入履歴を見ると、『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紺星あかり』が発送され、今日には届く事が確認できた。

「…ひとまず安心か?……いや…」

何か密林以外のサイトが重過ぎて文句を言っていたような気がする。
しかもそのサイトで何かを購入したという、信じたくない記憶がある。
その後に、何か光ったような…?
素晴らしくする悪い予感に、自分の部屋を見渡すと…
部屋の真ん中に全面真っ黒なルービックキューブ状の何かがそこにはあった。

「…ルービックキューブ?なんでこんなのあるんだ?……」

いや、本当にわからない。

全面黒のルービックキューブとか、どう回しても何にもならないじゃないか。

「うーん…なんか大きくないか?」

大きさは普通のルービックキューブの2倍ぐらいありそうだ、正直、ルービックキューブの記憶も曖昧だから適当ではあるが。

何でこんな物があるのだろうと、椅子から立ち上がり、ルービックキューブに近づこうとしたタイミングで、ルービックキューブから聞き馴染みのある女性の声が聞こえてきた。

『ご購入いただき、誠にありがとうございます。マスター登録、ＰＷＤの確認を行いますので、1分程お待ちください。』

「は?…え?」

この謎のルービックキューブ喋るのか、

いやそこじゃない、全く意味が分からんが、俺これを買ったのか?あれか、謎のサイトの購入ボタンをクリックした事で、俺の部屋に直送されたのか?そんな事あるか?

ドッキリ的なあれか？いや違うだろ。誇れる事では無いが、ドッキリを仕掛けてきそうな友達も、知り合いも居ない人間だぞ俺は。

頭の中がハテナで埋まりながら、ルービックキューブ？を眺めていると。

『マスター登録完了。登録名、出雲　空。変更がある場合、ＰＷＤ確認後、運営にお問い合わせ下さい。』

なんで名前バレた!?いや、購入の時に入れてたか？謎の怪しい物体に名前バレは恐ろしさを感じてしまうが、さっきから語りかけてくるこの音声、よく聞けば、ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ『結月ゆかり』ではなかろうか？それなら、このルービックキューブものＶＯＩＣＥＲＯＩＤ関連商品の可能性もあるのか？

『ＰＷＤの確認が取れませんでした。エリア範囲外の可能性があります。補償、機能承認、拡張設定のサービスは、ＰＷＤの確認が必要となりますので、ご利用頂く場合は、お近くのＰＷＤ圏内までお越し下さい。』

言ってる内容がよくわからないが、とりあえず補償とかは受けれないようだ。という

か、この結月ゆかりボイスはＶＯＩＣＥＲＯＩＤだと感じないぐらいに滑らかに話している、製作者すごいなと、場違いな思考をしていると。

『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ『紲星あかり』起動します。それでは、良きＶＯＩＣＥＲＯＩＤライフを!!』

その言葉が終わると同時に、謎の喋るルービックキューブの上に光の粒子が集まり始め、室内だというのにそこを中心に吸い込まれる様な風が吹き始める。

「マジでなんだこれ!」

目の前で起こる、非現実的な現象に狼狽え、強くなる竜巻の様な風を踏ん張りながら耐え、光輝くルービックキューブ上方に目が眩み、咄嗟に右腕で目を覆う。

数秒後、風が止まり、光が収まった事を認識して目を覆っていた腕を下ろし、現実を直視すると、『彼女』は嬉しそうに声を上げた。

「はじめまして、マスターさん!ＶＯＩＣＥＲＯＩＤの紲星あかりです!マスターさんの生活をお手伝いしますので、これからよろしくお願いします!」

絹のような柔らかさと繊細さを兼ね備えた、膝下まで伸びる二つ結びの髪を三つ編みでまとめ、まだあどけなさが残る整った目鼻立ちに、宝石のようなコバルトブルーの瞳が爛々と輝いていた。

ゴシック調の膝上までのワンピース、その上からジャケットを羽織り、両手両脚にはオレンジ色のアームカバーとタイツ。

そんな、今までに現実で見た事のないような美少女は、間違いなく、今まで画面の向こう側にいた、紲星あかりだった。

「…は?…っえ?……えぇ?……」

お互いの沈黙。

「……?」

情報の脳内処理が間に合わず、ポカンと紲星あかりを眺めるだけの時間が続くと、紲星あかりは喜色満面だった表情を、段々と不安な表情に変化させ。

「……あれ?思ってた反応と違う?……私、来るところ間違えました……?」

紲星あかりは半泣きであった。

これが彼女、『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ継星あかり』との、初邂逅だった。

◇◇◇◇◇

一旦、状況を整理しよう。

まず昨日の泥酔やらかし馬鹿こと、俺は、酔った勢いで『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紲星あかり』を密林で購入した、それとは別に、他の重すぎるサイトでも何かの購入ボタンを押していた……はず……。

そして、今日起きたら謎のルービックキューブの様な何かから、紲星あかりの本人登場である。

いや、なんでだよ。

現代科学では、人の家の中にルービックキューブを直送させたり、ルービックキューブから人が現れたり、ましてや画面の向こう側のキャラを現実に連れてくる事なんて出来やしない。

……もう、そこは世の中には不思議な事があるんだなぁ。という思考に落ち着けるしかないか。

人はそれを現実逃避と名付けているかもしれないが。

「でも、マスターさんは、マスターさんですし……」と不安気に呟きながら、半泣きからそろそろ７割泣きに進化しそうな彼女に、意を決して声を掛ける。

「あの、紲星……あかりさんですよね？何がなんだか全くわかっていないので、教えていただいてもよろしいでしょうか……？」

見た目と設定年齢は明らかに年下の女の子に、オドオドしながら、フワッとした質問をする。２０才フリーター男子の姿がそこにはあった。

「!!っはい！私の詳しい機能紹介ですね！」

俺が聞きたいのは、なんで朝起きたら我が家に貴方が居るのでしょうか？という事であったが、質問の仕方が下手すぎる事によりディスコミニケーションが起きてしまった。

ただ、不安そうだった表情から、見てる物を幸せに出来そうな輝く笑顔になった事で、質問の訂正をする事は出来なかった。びっくりするぐらいかわいいな。

「私、紲星あかりは、『主軸世界』の最新技術をふんだんに搭載された、『認識世界』の中でも最高峰のアンドロイドであり、アンドロイドの中でも特に声に関する機能を最大限に高めた『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ』シリーズの１人です！」

よくわからない単語もあるが、アンドロイドと言うと、携帯の端末でなければ、人造人間のことであろう……と思う。

まさかあれか？現代技術では、こんな精巧で人間にしか見えないアンドロイドは作れないことを考えると、未来の猫型を自称するタヌキ型ロボット的な存在か？

ＶＯＩＣＥＲＯＩＤが将来的にアンドロイドとして家庭に１人いると考えると、凄いな未来。

「私の出来る事は、その世界の発展度合いにもよりますが、１ｔ以下の荷物の運搬！疑似サイキック因子の活性により、確認されている超能力の使用！反エネルギー物質による強防御性能により、ブラックホール環境以外での活動が可能です！特に声を使った技術、超能力性能は圧倒的ですよ！」

ピースサインを前に掲げながら、彼女は得意気にスラスラと聞き惚れる様な声で説明する。

「そして、『主軸世界』にアクセスする事により、全認識世界の情報を入手する事ができます！これにより、全認識世界のサブカルチャーを楽しむ事ができるんです！そして、情報を統合し演算する事により、正確性の高い未来予測も可能なんですよ！」

彼女は、むふー、と大きな胸を張ってドヤ顔をしてくる。

相変わらず、よくわからない単語は有るが、言っていることが本当だとしたら、タヌキ型ロボットレベルの超ハイパーオーバースペックである。

というか、出来ることの規模がヤバすぎる。だが…

「超能力使えるの？マジで?!」

ただ、超能力は青少年の夢である。ギリギリ青少年を自称している自分はワクワクを感じてしまった。

「もちろん使えますよ！……ただ…」

「ただ？」

申し訳なさそうに、困った笑顔をしながら彼女は続ける。

「ただ…、えーと、いくつかの機能を解放する為にはチケットを購入いただいて」

あー、成程、金がかかるのか。

貯金自体は遺産の関係や、アルバイトで稼いだことで、同世代の中では相当あると自負している。

値段によるが、多少高くても間違いなく、それ以上の見返りが有るだろう。

「チケット一枚で一回くじが回せますので、その中から当選したものを獲得、機能解放できるのです」

「ガチャじゃねーか!!」

推定未来には、まだそんな悪い文明が残ってるのか!!

「あはは―…、ちなみに超能力機能解放は０．００３％で当たります……」

「絶対当たらねーじゃねーか!!」

悪い文明が濃縮されて悪化してる、そんな未来否定してぇ…

「お洒落な服や猫耳などの付属アイテムなども当たるので、是非回しましょう！」

しかも悪名高い闇鍋ガチャじゃねぇか…

「でもでも!・『機能解放!・アクセも当たる激運クジ!・』を回さなくても、『主軸世界』へのアクセスや、多少の身体強化は出来ますので……」

ひどい名前のガチャだ…当てられたやつが激運ってことか。

ただガチャを回さなくても、主軸世界?・未来か?・の情報を見て、将来の事が分かるのであれば、全然それだけでも現代で生きるにはヤバいぐらいのチートだ。

「なので『主軸世界』にアクセスして、機能利用の承認を取りたいのですけど……ここって日本で合っていますよね?・認識世界内であれば、関東圏に行けばＰＷＤのエリア内に入れると思うんですけど……」

「…?・ここ東京だぞ?・」

紛う事なき、我が家は田舎でもあるが、東京都に居を構えている。

「え?・」

「…え?・」

そんな、予想外みたいな反応されても困るのだが……

その日、アンドロイドも冷や汗を流す事を、初めて知った。

◇◇◇◇◇

この世界にはパラレルワールドというものが無限に存在するらしい。

普通その存在を認識する事は出来ないのだが、文明の発達により、パラレルワールドを認識、干渉できるような、超技術を持った世界を『主軸世界』と呼称するらしい。

パラレルワールドへの干渉とかいうヤバい技術で、他のパラレルワールドへの交流や、支配などをしたりしているようだ。

他にも、『主軸世界』から認識され、干渉を受けている『外周世界』。

『主軸世界』に認識はされているが、必要な物資が無いなどの理由で干渉を受けていない、『末端世界』などがある。

これらを纏めて『認識世界』と呼ぶとのこと。

そして、パラレルワールドが無限にある関係上、『主軸世界』の住人でも認識できていない様な遠い遠い世界を『認識外世界』と呼ぶとのこと。

冷や汗をダラダラ流していた彼女に、気になっていた単語などの説明を頼んだところ、以上の事がわかった。

一通り、単語の説明を受けてわかった事は、彼女は、自称猫型ロボット的な存在ではなく、異世界産のアンドロイドだという事。そしてーー

「ここが『主軸世界』から遠すぎる、ど田舎な『認識外世界』なせいで、君の能力は一切使えないって事でオッケー?」

「ごめんなさいぃ〜、まさか『認識外世界』の人に購入されると思ってなくて、限定的な機能解放もＰＷＤを通さないと何も出来ないんです〜」

ワタワタと手を振りながら半泣きで弁明をする紲星あかり。

『認識外世界』の住人が『主軸世界』存在を購入出来たのは、天文学的確率の超レアケースらしい。少なくとも有史始まって以来とのこと、よくわかんないけどすごい。

ちなみに、ＰＷＤとはパラレルワールドドメインの略らしく、『認識世界』にある『主

軸世界』に繋がるＷｉ―Ｆｉみたいな物らしい。我らが世界は電波すら届かない未開の地あつかいのようだ。

「何も出来ないですけど、捨てないで下さいぃ～」と泣きついて来る紲星あかり。

正直、音声ソフトを買ったつもりが、人間にしか見えないアンドロイドを買っていました！という現状をいまいち理解出来ていない。

とりあえず、慣れてはいないが慰めてみる。

「大丈夫大丈夫！捨てないから！なにか出来ることあるだろ、多分…」

「本当ですか？捨てないでいてくれますか？クーリングオフもしませんか？」

さっきの説明を聞く限り、こんな田舎世界ならクーリングオフしたくても出来ないんじゃないか？

「クーリングオフもしないから！とりあえず、掃除とか、料理とかやってくれるだけで助かるから」

果たしてそれは、超高性能アンドロイドにしてもらう事なのか分からないが、つい口から出てきてしまった。

「成程！家事ですね！それならお任せください！他のアンドロイドが出来ること全般は、私にだって出来ますからね！」

本人は乗り気らしい、花が咲くような明るい表情になってくれたから正解だったようだ。

「……うん、それじゃ掃除からやってみてくれ……」

凄く自信満々な彼女に、俺は一抹の不安を抱いて掃除用具入れに向かった。

◇◇◇◇◇◇◇

「これは何ですか？」

「……何って、箒だけど」

「ほうき？何かのオモチャか何かですか？掃除用器具はどこにありますか？」

「ーーーーよし、わかった。掃除はいいから料理をしてくれるか？」

◇◇◇◇◇◇◇

「……料理のやり方、わかるか？」

「もちろんです！全自動料理機に、食べたい料理の情報をインストールすればいいんですよね！」

「……ｏｈ……ｎｏ……」

「えぇっ！マスターさん、何で頭を抱えているんですか！」

◇◇◇◇◇◇◇

「……」

家事全般が全滅だった。まさかここまでだとは…

目の前でテーブルの向かい側に座る彼女は、いじけた様に両手の人差し指をツンツン合わせながら話し始める。

「……本当は…、ＰＷＤを通して、その世界の常識とかをインストールするんですけど……それが出来ないと『主軸世界』のやり方しかわからないんですぅ……」

家事ですら、『認識外世界』という枷で足が引っ張られているらしい。

「……それじゃぁ、何が出来るんだ……」

「ええと…、歌ったり、お話ししたり、応援も出来ますよ!!ほらっ！フレー！フレー！マスターさん！」

手を大きく振りながら応援してくれている姿は可愛いが、何を頑張ったらいいのだろうか。

そんな姿を眺めていると、彼女から、ぐぅ～、とお腹の音が鳴った。

「あっ…！えー……そのぉ、これは……」

頬を恥ずかしさからか真っ赤に染めた彼女に、つい俺は苦笑してしまう。

アンドロイドもお腹が空くのか。

「……それじゃ、もうこんな時間だし昼飯でも食べるか、ちょっと待っててくれ」
朝から怒涛の展開で気づいていなかったが、もう12時を回っていた。朝に何も食べれていないので、俺自身も空腹を感じていた。

「わ、私も何か手伝います！」
「いや、大丈夫、すぐ出来るから座って待っててくれ」

その言葉に、彼女はしょんぼりとしてしまうが、下手に何かされる事の方が恐ろしいので、ゆっくり待って貰おう。
少しばかりの罪悪感を覚えながら、俺は料理を始めた。

◇◇◇◇◇◇◇

保管してあったミートソースに、冷蔵庫にあった玉ねぎなどの具材を炒めて合わせ、

いい硬さまで茹でたパスタに乗せる、簡単なミートソースパスタの出来上がりだ。
少しの手間で美味しいものにありつけるので、よく作る料理の一つである。
２人分を作る事はほとんどなかったので、要領が分からず結構多めに、３人分ほど作ってしまったが、残れば夜食べればいいだろう。
紲星あかりは二次創作の中で、食いしん坊という設定がある。
あくまでそれはファン内で作られた物なので、我が家に訪れた紲星あかりはどうかはわからない、しかもアンドロイドだ、人間とは違った食べ物を摂取するのかと疑問に思い、作る前に聞いてみたところ。
「なんでも大丈夫です！特にカレーが大好きです!!」
とのこと。
今日は材料の関係でカレーは作れなかったが、次回はカレーを作るかと考えながら、ふと冷静になる。
「そうか……、一緒に住む事になるのか……」
夢の様な話であろう、一つ屋根の下で、二次元から飛び出して来た女の子と同棲生活。
そんな願って叶う事はない事が現実になってしまっていた。

正直、一人で生きている方が、凄く楽だろう。今までもそうやって生きてきた。
自分の将来の不安を和らげるために、一人で生きていくには問題ない程度の貯蓄もある、それが、二人になるとどうなるか分からない。
紲星あかりも、あの見た目なら俺から離れたとしても生きていけるだろう。
それこそ、俺と一緒に暮らす以上に、いい生活は間違い無く出来るのであろう。

だけどーーーー

「…ほら、出来たぞミートソースパスタ、自分で食べる量を皿に取ってくれ」

キッチンからリビングに戻り、彼女の目の前に大量に作ったパスタを置く。

「わあ！凄く美味しそう！食べていいですか!?食べていいですか!?!」

つい、目を爛々と輝かせる彼女の姿に、待てをしている最中の大型犬を幻視してしまう。

「…いいよ、先に食べててくれ、俺はキッチンの片付けしたら食べるから」
「わかりました！いただきます!!…もぐもぐもぐもぐもぐもぐ」

いい食べっぷりの彼女に、苦笑しながらキッチンに戻る。

ーーーだけど、今は、彼女の見惚れる様な笑顔を、曇らせる様な事はしたくないな。
そんな事を考えながら、片付けを始めた。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「ごちそうさまです!!マスターさん!!ホントに、すっっっごく美味しかったです!!!!!!!!」

俺がキッチンの片付けを終わらせたタイミングと、彼女の完食のタイミングはほぼ同時であった。
満足そうな、幸せが溢れているような表情の彼女。

「…それは、よかった……ははっ」
そう、完食である。
片付けが終わってリビングに戻った所で、２人前には多すぎる程度の量を、彼女は一人で食べきっていた。
いや、食いしん坊は二次創作じゃ無かったんかい。

「マスターさんは食べないんですか？」
…あれを一人前の量だと思われていたらしい。

「あぁ…、作りながら結構つまんでたから、大丈夫だ…」
「…？そうなんですか？」
納得はしていなさそうだが、俺の分は君が食べたよと、いろんな意味で悲しい真実を知るのは一人でいいだろう。
「本当に、凄く美味しかったです!!!マスターさんは、料理がとっても上手なんですね!!!」
「口に合ったようでよかった」
少し、自分の頬が緩んでいる事を自覚しながら応える。

こんな適当な料理で、これほど大袈裟に喜んでくれるのは嬉しいものなんだな。お世辞は入っているだろうが。

ただ、こうなるとこの先の事が大変になってくる。

今の食事量を見るに、彼女は俺の2～3倍の食費が掛かるようだ。

家賃などが掛からない関係上、バイトでも貯金は出来ていたが、ここまで、エンゲル係数が高くなるとそうも言ってられなくなる。

それだけでなく、消耗品等も無くなるのが早くなったり、彼女が欲しがったりする物があれば、出来れば買ってあげたい。

一番はお金の心配か、と考えた時に、ふと気になった事を聞いてみた。

「そういえば、君の事を俺は『購入』したんだよな？支払いってどうなってるんだ？」

そういえば、全く考えていなかった。

後で支払うのか？クレジット引き落としとかするのか？『主軸世界』の人間はこんな世界の通貨必要なのか？わからない事ばかりだ。

「支払いはもう済んでいるはずですよ？それじゃ無いと、私が届きませんから！」

「それなら安心か」

少なくとも、金額が足りないから内臓を売れ！とかにはならなさそうだ。

「はい！支払いは、購入ボタンを押した時点で、その人の登録している金融機関などから直接済まされるので！」

なにそれ恐ろしい。

「どんな技術なんだよ、値段はどれぐらいになるんだ？」

何故か凄く嫌な予感がする。

「こちらの世界の情報が少ないのでわかりませんが、『主軸世界』基準では第一級恒星より高いって言ってました！」

「……こう…せい？」

少なくとも、この世界で俺は星を買えるほどの財産は無い。

いやまさか、『主軸世界』では星の一個や二個安い物なんだろう、そうに違いない。

「そんなすごい金額をポンと出せる、マスターさんは凄いですね！」
いや違ぇわ、これ『主軸世界』基準でも結構な買い物だわ。
「はは……、ちょっと確認したい事があるから待っててくれ」
一声掛けた後、自室のパソコンに向かう。
自分の嫌な予感が当たらない事を祈りながら、パソコンを起動し、ネットから銀行の残高のページを読み込む。
…カチッ、カチッとクリック音だけが自室に響く。
読み込みの時間がひたすら長く感じる。
いつもはどれだけ貯金が出来たか楽しみにしている時間だったはずだが、今は地獄への待合時間にしか感じない。
ついに、読み込めた、そのページには。

残高　　０円

残酷にも、スッキリとした数字が、残高に刻まれていた。

「……は…は」

ログインしたＩＤが間違っていたのかと何度もログインし直したり、取り敢えずやっとけ精神でパソコンを再起動してみても、残高に変化は見られず。

残高　　０円

俺の、将来の為の貯金は、一晩の酔った勢いで０になり、

「マスターさん！この食器ってどうしたらいいですか？」

代わりに、我が家に紲星あかりがやってきた。

彼女は食べ終わった皿を見せる様に持ち、不思議そうな顔をしていた。

◇ーーープロローグ『ゼロから!!』ーーー◇

これは、職歴、彼女、貯金無し。

無い無いだらけのフリーターが、ゼロから始める動画投稿生活だ。

# 第一話　私と、私の、ミチとの出会い

「それでは、会議を始めたいと思う」

「おーー…、なんか、かっこいいですね！」

俺の急な会議宣言に、パチパチと拍手をしながら乗ってくれるのがご存知、食いしん坊キャラが二次創作に収まり切っていなかった紲星あかり。

俺たちは今、テーブルを挟んで向かい合いながら座っている。

「それでは議長！議題はなんでしょうか！」

姿勢良く、右手をピンと挙げ、質問をしてくる。

すげぇノってくれる、本当にいい子だな。

「現状と、これからについて会議だ」
残高の確認後、放心していたところを彼女に心配されたが、なんとか平静を装い、落ち着く為に皿洗いをして、今に至る。
「まず現状、一番の問題が……金が無い……」
言いながら頭を抱えてしまう。
悪質な事に、貯金用、支払い用に分けていた銀行口座、両方とも残高がゼロになっていた。
最悪、支払い用の口座が残ってさえいれば、彼女がいても少しの間困らない程度の金額が入っていたのに、そこの希望も断たれてしまった。
最後の希望は財布に残っていた一万円と小銭が少しだけ。給料日を迎えれば何とか生きて行けるが、それも二週間後。紲星あかりの食費を考えるとひたすら心許ない武器である。
「……マスターさん……私を購入して、お金無くなっちゃったんですか？」

「あぁ……まあ、そう…だな……うん」

言えねぇ、酔った勢いで変なサイトに入って、値段も見ずに買ったとか、絶対言えねぇ…

誰が悪いかというと、泥酔しながら買い物をした俺が一番悪い。今後一切酒は飲まない。

次点で悪質なのは、酔っ払いでも簡単に買えるようにした上、謎の技術で銀行から貯金を残らず搾り取った『主軸世界』とやらの会社だとは思うが。

「大丈夫ですよ！私、高性能アンドロイドなので！私が働いてお金を稼いできます！」

「ダメ」

「ええっ！なんでですか!?」

「だって身分証ないし」

それもあるが、正直俺のせいで間違ってこの世界に来てしまったようなものなのだ。金が無いのは俺の問題で、彼女に責任はない。それなのに働いてお金を稼いで貰う事に強い抵抗があった。

「まあ、そこは俺が日雇いとか行って稼いでくるから、なんとかはなる」

折角の連休だが、もうなんかいろいろと仕方ない。

「そこで、君には家事をやってもらいたい」

「家事ですか……ごめんなさい……私やり方わからなくって……」

先程の何も出来なかった自分を思い出すのか、落ち込んだ表情になってしまう。

「あぁ…、大丈夫！一からやりかたちゃんと教えるから…」

家事をやって貰う事も正直心苦しいが、それ以上に家の外に出られる方が問題にな

る。

なにせ彼女は画面からそのまま出てきたと言っても過言ではない程『紺星あかり』だ。絹の様な白い髪、深い海を思わせる青い眼、現実世界ではあり得ない程整った顔、シミ一つない綺麗すぎる肌、ＡＰＰだか魅力だかのステータスが人間では届かない領域にいるアンドロイドである。

そんな彼女を外に出したらどうなるか、全く予想が出来ない。

外に出るにしても、我が家の裏手にある全く人の来ない河原ぐらいだろう。

「それなら……出来ると思います！私、高性能なので!!」

みるみる表情が明るくなる彼女、自分の高性能にはやはり自信があるらしい。

今のところ、その高性能を見せつけてくれたのは食欲だけなのだが、やってくれるみたいだ。

「助かる。後でやって貰う事の確認するとして、現状は金が無いから俺が外で働いて、申し訳ないけど、君には家事をお願いすることになる」

「申し訳ないなんて、とんでもない！あかりさんにどどーんとお任せください！すぐに完璧な家事をお見せしますよ！」

言ってる内容は心強いが、今のところ打率ゼロ割の自信に、多少不安は覚える。

本人曰く高性能アンドロイドなのだから、簡単な家事ぐらいならすぐ出来るだろう。

……多分。

「それじゃあ、次は、君のこれからのことだけど…」

ピンポーン、と、これからの話を遮る様にインターホンが鳴る。

「マスターさん！これはなんの音ですか？呼び出しですか？」

「多分荷物が届いたんだと思う、少し待ってくれ」

椅子から立ち上がり、玄関に向かう。

そういえば今日届くって書いてたな、と思い出しながら配達員さんから荷物を受け取

る。

不思議なものだ、と思う。購入を考えていたのは本当はこちらの筈だったのだが…

「マスターさん、何が届いたんですか?」

玄関から戻った俺に、彼女はトテトテと近づき、興味深そうに段ボールを覗き込む。

…これ見せていいのだろうか?出会ってはいけない者が出会うことにより対消滅とかしたりしないだろうか?

流石に無いかと考えて、彼女にこの世界の『彼女』を見せてみることにする。

「『主軸世界』にも君が居るように、この世界にも『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紲星あかり』は存在するんだ」

「この世界の私ですか?」

キョトンとした顔で首を傾げる主軸世界何某出身の紲星あかり。

「それがこれだ」

そう言いながら、段ボールを開き、彼女にこの世界の『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紲星あかり』を見せてみる。

紲星あかり同士の、世界で初めての対面であろう、……多分。

「おぉ！私の絵が書いてあります！この箱の中に、展開用の次元格納装置が入ってるんですか？」

『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紲星あかり』を紲星あかりが持ち、振ったり、頭より高く掲げたりしている。初めての玩具の遊び方が分からない子供に見える。

「…はは、そんな次元が違うような物が入ってる訳じゃないな、それに、この世界は君みたいなアンドロイドを作れる技術は無いしな」

「そうなんですか？それなら、この世界の私は何が出来るんですか？」

この世界の箱を、自分を頭の上に乗せながら、目をパチクリさせ聞いてくる。

まあ、彼女が凄く気になっているみたいだから、これからの話を後にして、この『認識外世界』のＶＯＩＣＥＲＯＩＤの説明をするか。

「直接見た方が早いから、パソコンのある部屋まで行こうか」

彼女が不思議そうに首を傾げると、頭の上乗せていた、この世界の箱の彼女も一緒に首を傾げたように見えた。

◇◇◇

「というわけで、これがこの世界の『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紲星あかり』だ」

準備に多少手間取った事もあり、少し待たせてしまったが、その間も「あれはなんですか？」「これは何に使えるんですか？」と何事にも興味津々と言う感じに質問をしてきてくれたおかげで、沈黙が気まずい事などは無かった。

…質問されて困る様な事もあったが。

「ほえ？これがですか？」

ＶＯＩＣＥＲＯＩＤの音声入力画面を見て、俺の後ろからパソコンを覗き込みながら、よく分かっていなさそうな声で聞き返される。

「ここに文章を入力すると、その通りに読み上げるんだ」

こんな風に、と言いながら取り敢えずの文章を打ち込んでみて、再生をクリックする。

『はじめまして！ＶＯＩＣＥＲＯＩＤの紲星あかりです！』

「おぉー！私の声です！凄いです！」

この世界の自分の声に興奮する様に、彼女が画面に顔を近づける。

それにより、必然的に紲星あかりと俺の距離が近くなる。助けてくれ、その距離感は生まれてこの方、彼女どころか女性と交友関係を持った事のない俺にはいろいろ厳しすぎる。

「それでマスターさん！他には私は何が出来るんですか？」

「他には……って言ってもこれだけだな」

「え……これだけなんですか？」

驚いたように聞き返す紲星あかり。

それもそうか、『主軸世界』にアクセスさえすれば、この世界では青狸ロボット並に何でも出来る自称ハイスペックアンドロイドだ（本人談）。技術で圧倒的に劣るこの『認識

外世界』でも多少の高スペックな自分を想像していたのだろう。
　出来る事はこれだけではあるが、それが全てではないのが、このＶＯＩＣＥＲＯＩＤ界隈だ。

「これだけだからこそ、こんなことが出来るんだ」

　いつも観ている動画サイトを開き、適当にオススメに出ている『紲星あかり実況』動画を開く。
　動画の内容は、一時期流行った壺に入ったおじさんが、ハンマーで登山をする謎のゲームで、思ったように操作が出来ない事で、過剰なストレスがかかる上、一つのミスで何時間もかけて進んだステージを一からやり直す事になる、所謂鬼畜マゾゲーム。
　それを、紲星あかりが実況するというものだ。

『おはこんばんにちは！実況の紲星あかりです、今日は久々にこちらの壺オジをやって行こうと思います。』

「マスターさん！画面の中の私が喋ってますよ！」

画面の中の紺星あかりのイラストを、こちらを向きながら彼女が指差してくる。顔が近い近い。

どうやらオススメに出てきただけあって、イラストを口パクさせたり、表情をよく変化させるなど、凝った編集をする実況動画だったようだ。昨日の夜の投稿で、２万回再生されている。

「さっきのＶＯＩＣＥＲＯＩＤとイラストを使うと、まるで本当にキャラクターが喋っているみたいに動画が作れるんだ」

「へー……、この画面の横から流れる文字は何ですか？」

画面の自分自身をじっと見つめながらも、疑問は尽きない様子だ。

「それはコメント、この再生時間に文章を打ち込むと、他の動画を観ている人にも、この時間に打った文章が流れる機能」

「…このコメントさんは、一つ一つ別の人がしてるんですか？」

「まあ、何個も打ってる人もいるだろうけど、基本違う人が打ってると思う」

「沢山の人達が観てるんですね……」

「スラングばっかりでわかりづらいかも知れないけど、この『うぽつ』がUPお疲れ様、動画投稿お疲れ様の略で」

彼女の分からなさそうな単語を指で示しながら伝えてみる。

「この『草』ってコメントが、面白いとか笑ったとかそんな意味」

「ほへぇー」と返事なのかよくわからない声を漏らしながら、紲星あかりは吸い込まれる様に画面を見続ける。

『半年前に諦めたこの壺オジも、一切練習をせずに熟成された華麗なテクニックで登頂

決め込んじゃいますよ！』

『草』

『いや練習してないのかよ』

『もう見た』

『絶対錆び付いてるだろそのテクニック』

『半年ぶりなんて全部忘れてるわｗ　ｗ』

「……たくさんの人が画面の私を観て、コメントをしてますね」

彼女はポツリと、呟く。その視線は動画ではなく、コメントを一つ残さず読みこんでいた。

……画面の中の『ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ紲星あかり』と自分を重ね合わせているのだろうか？

正直、「凄いです！」ぐらいで終わるかと思っていたのだが、予想以上に彼女が、動画とコメントにのめり込んでいる。

自分の好きな事にハマってくれる事は素直に嬉しいので、最後まで動画を一緒に見る

事にした。

『前回はこの連続ランタンまで行った後に、スタート地点まで戻されて終わりましたが、今回は過去の自分を超えて、ゴールに辿り着きますよ！』

『ランタンは大分序盤だぞ？』
『下まで落ちた時、マウスの動きだけで心折れたのわかるの草なんだぁ』
『もうやっぱり無理そう』
『また半年後、頑張ろうな…』
『ていうか動画時間長くて草』

「観てる人全員が、動画にコメントしてるんですか？」

動画から目を離す事は無いが、声のトーンだけでも、どこか真剣さを感じる。

「みんながみんなでは無いな、この動画は再生数は二万回だけど、コメントは千ぐらいだから、このコメントをしている人達の二十倍ぐらいの人数がこの動画を観て楽しんで

る」

　というか、この人の動画見たことあるな、ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ界隈では有名な人で、ＶＯＩＣＥＲＯＩＤ界隈以外の人ともコラボしたり、幅広い人脈を持つ人だ。
　自分もこんな人になりたいと、動画投稿をしようとする上で、目標にしている中の一人だ。壺オジやってたのかこの人。
　そんな事を考えていると、前回までクリア出来ていなかったと説明していた、難関エリアをクリアしていた場面になった。

『どうですかみなさん！遂にランタンを超えましたよ！これでゲームクリアです！いやー長かったですね、この一年間の記憶が走馬灯のように駆け巡ります……』

『走馬灯は死ぬ前定期』
『ここまで天国　これから地獄』
『ここクリアでここまで喜んでる人初めて見た』
『これには壺オジも喜びの舞、なお』

『……なんか全然雰囲気の違うところに来たんですけど……』

『草』

『この動きだけで戸惑いがわかる』

『今時、壺オジのステージ全然知らないのも新鮮だなｗｗ』

『……ゴ、ゴールは多分もう少しですし、頑張ります……、これをクリアしたら、私は山積みしてる新作ゲームをするんだ……』

隣で紲星あかりが、集中して動画を観ているので、俺も特に声を掛ける事もなく、動画の続きを黙ってみる。

動画では、苦戦している所を要所要所で動画に挟みながら、助長にならない程度に失敗シーンと進んだシーンを写していく。

そして、壺オジのステージクリアまであと一歩まで辿り着く。

『はあ…はあ…、なんですかこのゲームは……人をどれだけ憎めばこんなゲームを作れるんですか……絶ッッ対、爆音コウモリと蛇は許しません……』

『普通に桶ジャンプから蛇に乗って、動画終わったと思ったわ』

『半年に一度の楽しみがなくなるからもう一回落ちて♡』

『編集で分からんけど、マジでずっとやってたんやろなぁ…』

『今回よく諦めなかったなｗｗ』

『マウスガックガクで草』

最終局面、塔を登り切ったらほぼゴール確実の場面までたどり着いた。

それを観ている俺も、知らないうちに手に汗を握りながら、動画に集中していた。

『この先何も無いんですけど！どうしたらいいんですか！もうスタートに戻りたく無いんです！お願いです!!』

『上に飛んだら終わりのところで困惑してて草』

『あと一歩、前へ！』

『情報無しならここ怖いわなぁ』
『ここから塔の反対側行ったらマジで草』
『ええい、ままよ！女も漢も平等に度胸！やってやらぁ！……って飛んだぁ!!』
『いやー、本当にクリアすると思わなんだ』
『人が浮くわけ無いだろ……浮いたぁぁ!!』
『後はウイニングランだな』

空飛ぶ石のエリアを困惑しながら超え、そして。

『エンドロールだぁぁぉぁ!!!!やっっっっとクリア出来ました!!クリアタイムは休憩時間含めて二日間!!私の貴重な休日を返してくれ!!!!……完走した感想ですが、クリアした時は凄くいいゲームに感じましたが、二度とやらんわこんなゲーム!!めっちゃ疲れました……。後日談ですが、とりあえず友達の投稿者全員に善意でこのゲームを贈りました、自分の優しさにナイアガラ級の涙が出そうです』

『乙！今更、壺オジの動画見ると思わんかったわ』
『お疲れ様！……ところでぇ、このゲームは金壺っていう要素がありましてぇ』
『この後、仕事はしんどすぎで草』
『壺オジテロやめーや』
『長時間のご視聴ありがとうございました！私の休日が溶けて消えたので『いいね』くーださいっ！』
『乙』
『いいね偶数回押した』
『面白かった！』
『いつも面白い動画ありがとうございます！』

そして、広告が流れて動画が終わり、部屋の中に静寂が訪れる。
紲星あかりは放心した様子で、動画の終わった画面を見つめている。
確かに面白い動画ではあったが、放心する程であっただろうか？彼女の反応が予想以上で、俺が戸惑ってしまう。

なんとなく話しかけづらく、黙って待っていると、彼女がバッとこちらを向き、肩を掴んできた。いやほんと近い近い。

「マスターさん!!!すっっっっっごいです!こちらの世界の私は、こんなに沢山の人を夢中にさせたり、楽しませる事が出来るんですね!!!!」

どうやら一番の関心は、こちらの世界の『紲星あかり』にあるらしい。

「コメントさん達が、一緒に応援したり、白熱したり!この世界の私は、私よりもずっと沢山の人に必要とされて、ずっと、ずっと!いっぱいの人を楽しませているんですね!」

今までで、一番の熱を持った声で、その瞳を爛々と輝かせ、彼女は俺に向き合い、思いの丈を伝えてくる。

そうか。

「マスターさん!!!私、この世界の私みたいに」

紲星あかりは、出会ったのだろう。

「沢山の人に楽しんで貰えるような、そんな!そんな、凄い動画を作りたいです!!!」

広い視野を持った場合、大きな出来事ではない、それでも人生を進む道を大きく変える、そんな出会い。

人によっては、それは運命と呼ぶものに。

◇ーーー第一話　私と、私の、ミチとの出会いーーー◇